

中村ヨシミツのライブ

<< 作成日時 : 2011/07/29 13:41 >>

2011年7月28日



TODAY'S LIVE is...

7/22 (FRI)

中村ヨシミツミニディナーショウ
～ギター人生48年(ヨイワ)

特別企画 組曲～幻～
作・阿木理子 曲・中村ヨシミツ
(砂地獄/作曲・宇崎竜童)

出演 ギター 中村ヨシミツ
歌 香川有美
歌 三原ミユキ

特別出演 語り 人村栄美
書フォーマー 山根墨仙

アンコール・ライブも
あります!!

September Eleventh

OPEN 18:00
LIVE 19:00
CHARGE ¥1000
1d



不思議なライブ

去る22日(金)に赤坂で不思議なライブが行われた。

中村ヨシミツさんとそのメンバーの公演であるが、それだけであれば普通のミュージックライブであり、多少楽器の編成におやっと思えるメンバーが加わっているだけであるが、今回は、特別出演者が書と一人語りという異質の要素が入った。

ヨシミツ氏はこれまで詩人その他様々な人たちとコラボを行ってきたその道のパイオニアの一人であるが、一人語りはともかく、書とのコラボというのは聞いたことがない。

その書家は書フォーマンスという分野を創出した山後墨仙氏である。ヨシミツさん

が山後氏と組んだ初めてのライブ日ではないが、音楽家が書と組んでライブを行うというのは(各種コラボが盛んな現今とはいえ)やはり異質といってよいであろう。

それが見事ぴたりと壺に嵌っていつところに、魂のギターヨシミツ氏の懐の深さと山後氏の類稀なる技量と気迫が感じられるのである。

ヨシミツさんと歌姫たち

私はこの両者と長年の付き合いがあるが、それぞれのライブへ出掛けて行って裏切られたということが一度もない。

ヨシミツさんはスタイルが確立しているが、つねに全身全霊でギターと向き合っている姿が新鮮であり、同じ曲でも聞き飽きるということがないのである。

彼は単独で演奏をすることはなく、つねに素敵な歌姫と組んで公演を行う。彼が公演のイニシアチブを取っているとはいえ、基本的には歌の伴奏者としての登場なのである。

彼が当時人気を博した歌姫(例えば山崎ハコ)と組んであちこちでライブを行い、その取り合わせの妙が人気を呼んだが、メジャーになることはなかった。例に挙げた山崎ハコは有名になったが、ヨシミツさんはあくまで伴奏者の位置に止まった。

なぜなら、彼のギターは伴奏の域を超えており、クラシックとかポピュラーとかといったどんなジャンルにも属することがなく、メジャー化を否定あるいは拒否する類の音を響かせ続けてきたからである。伴奏から離れた時のソロ演奏は鬼気迫るものがあり、ギターは津軽三味線のような一個の打楽器と化す。

もしかしたら本人はメジャーに成りたかったのかもしれない。しかし自らの魂と音の響きがそれを拒否していた、というべきかもしれない。

現在は、クラシック出身の歌姫三原ミュキさんと組んで公演を行っているが、その前はフアドでは右に出るものがない香川有美さんと組んでいた。

ミュキさんは聴くものの胸に染み入るような哀切で美しい声と姿の持ち主であり、有美さんは聴く人の魂を驚掴みにして持ち去ってしまうような迫力のある声と姿の持ち主である。

その二人こそがヨシミツ氏と共にこの日のライブの主演であるが、書と一人語りという特別出演を設定することによって、ライブに奥行きを持たせることに成功している。

阿木燿子、三原ミュキ、香川有美

この日のライブを盛り立てることに一役買っているのは「ノヴェンバー・イレブンス」(9・11)と名付けられた店の存在であることは疑いえない。

その店は、作詞家阿木燿子さんと、歌手にして作曲家宇崎竜童氏御夫妻が経営する飲食店&ライブハウスなのである。

店の雰囲気作りもそれなりの工夫がしてあって、場所といい店主の存在といい、何一つとして不足するものがない。

阿木さんはヨシミツさんとは古くからの知り合いということで、彼のための詞を作っている。それは組曲「幻」と名付けられていて、この日のライブのテーマとなっている。

その曲をミュキさんが歌う。歌詞は四文字の熟語から成り立っていて、ありとあらゆる四文字の熟語が頻出する。まるで熟語の授業みたいである。

阿木さんの名をもってしても、この歌は決してTVなどで放映されることはないであろう。またそういう意図で書かれた詞としか言いようがない。

しかしながら、ミュキさんの巧みな歌唱力と魂のギターのカ強さによって、歌として完璧に成立している。

ライブの場で歌われ続けることによって、もしかしたら世に出るということがあるかもしれない。もしTVなどで歌われるようなことがあると、歌詞に込められた反社会・反人生の毒が薄められ、四文字の熟語に込められた意味は単なる四つの文字の羅列にすぎないものになってしまうと思われるのである。

しかし、それは私だけの感想なのかもしれない。組曲の「砂地獄」という歌もまた阿木さんの作詞であり、これは夫君の竜童さんの作曲である。有美さんがカ強く歌う。

すでに有美さんのレパートリーの一つであり、彼女の最も得意とする代表作ともなっている。歌唱のど迫力は真近かで聴いた人でないと実感しないかもしれない。





山後墨仙・書パフォーマンス

さて、山後さんの書パフォーマンスである。トップに出演した彼は、この日の主題が幻ということで、あらかじめ半紙に「夢」と「想」を書き、その二つをr背後の壁の両端に固定しておいて、その中間の大空間に、左から右にのびる大きくのびのびとした筆使いで「幻」の字を書き、横に伸びる線の上に小さく「月」を描いた(写真参照)。

つまり幻月である。幻月というのは、実際の月の横に光学現象でもう一つ月が見える状態を言うのだそうである。まさにこの日のライブの主題にぴったりの即興書パフォーマンスというべきであろう。

今流行となっている観がある大筆を抱くように保持して走りながら書を描くパフォーマンスとは根本的に異なっている。

大筆のパフォーマンスはただ字を大きく書くというだけであるが、山後さんの書は、書が独自の表現すなわち芸術となっている。

この差は大きい。従って、公開の場で彼が書いた書は人気があり飛ぶように売れるのである。

この日、壁に貼った布に描いた彼の書はやはり買い手がついたとのことである。売るといっても決して高額の値を付けているわけではない。材料費にごくわずか上乗せした程度にすぎない。

書を手に入れた人たちがそれぞれの場所に飾ってしてくれるならそれで満足である、と彼は常々言っている。

欲がない人なのだ。物創りの基本姿勢である。



原発災禍一人語り

このライブに花を添えた人がもう一人いる。朗読と語りの一村朱美さんだ。彼女

はずっと東京に住んでいたが縁があって福島県のある町に移住し(町の名を失念)、今回の大地震と原発事故に遭遇することになったとのことである。

原発を人格化しながら、漫談のような軽妙で笑いを誘う口調で、原発存在の恐ろしさと政府の対応の不手際を指弾した。

私は彼女とは初対面であるが、長い間演劇をやっていたという経歴が、「一人芝居」に軽妙さだけではない奥行きを与えていた。

原発の利便さが「幻」であるという話しの内容において、極めてホットな話題でありながら見事にライブのテーマに即応していた。



さて、ライブ紹介の内容が少し煩雑なものとなってしまったが、出演者がそれぞれ独自の個性を発揮する人たちばかりであるので、そうならざるを得なかったものであり、容赦願いたい。

ここに出演した人たちについてはいずれ各個に語ることになるであろう。楽しみにお待ちしております。



2010年8月4日

何故肉牛が殺処分されるのか

福島原発事故は新たな広がりを見せているが、国の無策と建前論のために、どれだけの人が苦しみ悩んでいるか、その悩みと苦しみは、放射能が今のところほとんど影響していない地域では実感できないかもしれない。

人間は自分が当事者とならなければ、想像力は限定され同じ悩みや苦しみが届くことはない。人間は自分の勝手に動物や植物に自らの不始末を押し付けるが、例えば、人間のために食べられることを宿命づけられた食牛が、人間が定めた放射能測定値を越えたということで、食べられることもなく殺され焼却されてしまうということに、疑問を感じる人たちは多いと思う。

しかも、専門家は、たとえセシウムが規制値を超えて汚染されていたとしても、その牛肉を一日200g毎日100日間食べ続けたとしても、人体に害はないとTVで明言している。

それなのに、人の口に触れる前に殺処分してしまうというのは、国民の潜在的気分におもねって政権の維持を図るポピュリズムに過ぎないと私は思う。

肉牛への侮辱

国民の中には、福島産聞いたで買うのを止めてしまうバカオバサンが多いのは間違いない。政府の見解を、軽薄のそしりを免れないマスコミが尾ひれをつけて述べて立てるため、洗脳されてしまうからである。

同じ日本人が危機に陥っているのだ。福島県人の気持ちになってあえてその牛肉を食べるべきではないのか。

セシウムはストロンチウムなどとは違って半減期は短く、30日程度と報道されている。二ヶ月経てばセシウムは無くなる勘定である。

それでも一度汚染されたからといって、すぐさま殺処分されなければならないのだろうか？その答えを政府は明確に発表すべきである。

飼育業者は政府から相応の値段で買い取ってもらうから、経営上はそれほどダメージを受けなくて済むが、手塩に掛けて育てた家畜を殺処分にしてしまうことは精神的にダメージを受ける。

それ以上に、人間に食べられるために育てられ、そうして解体処理場に運ばれる運命のある哀れな肉牛たちにとって、云い難い侮辱であり悲運である。

セシウム牛を食べる運動を！

殺されることは同じかもしれない。しかし、人間の想像力は、食べられるために殺されることと人間の勝手な理由のために食べられることなく殺される、という違いは鮮明に見てとることができる。

食べても害が無いとされる生体を、殺して燃やしてしまうという肉牛に対する許し難い侮辱は、政治というものの限界と言ってもいい。

であるならば、何らかの団体、組織の手によって殺される運命にある牛を引き取って解体し、食べる勇気のある人たちへ格安で販売するという運動があっても良いのではないか？

政府がそれを許さないというのであれば、肉を食べたことによる放射能の影響が出れば、それは自らの責任であるとする一筆を差し出し、治療費は全て自己負担

とすることによればよい。

家畜の霊がさ迷い出る

思っただけでよだれが出るブランド牛を、みすみす殺処分してしまう行政の独りよがりな自己保身そのものの処世術に強烈に否を叩きつけて、希望者に肉を売れば良いのである。

福島産と聞いただけで敬遠するオバサン連中は度外視して、欲しいと堂々と名乗り出てくる業者消費者へ販売すべきである。

そうしなければ、肉牛たちは浮かばれない。霊となって身勝手な人間たちに永遠に祟るであろう。

口蹄疫等で苦しんだ家畜や飼育者とは微妙に立場が違うが、人間の都合でいきなり殺され処分されるウシ、ブタ、トリたちの物言わぬ怨みは人が暮らす地上にますます満ち満ちることであろう。

セシュウム、何するものぞ！皆で殺処分を撤回させ、美味しいセシュウム焼肉に舌鼓を打とう！

「セシウム汚染牛を食べよう」について

<< 作成日時 : 2011/08/16 12:27 >>

「セシウム汚染牛を食べよう」について

「セシウム汚染牛を食べよう！」というブログ記事に幾つかのコメントをいただいた。

その一つは、「言いたいことはわかるが言葉遣いにきをつけろ。/まじめに物を考える人間は『美しいセシウム焼肉』などとは口が裂けても言わないものだ。」(JA 剣士)という内容である。

初対面の人間に命令口調で怒鳴り付けるというのは、無礼千万な言い方であり、激しい怒りを覚えるが、これがインターネット利用者特有の匿名人間の習性だと思えば、怒るだけ無駄だということである。

私は焼肉が大好きなので、牛の焼肉はすべて美味しいものである、という固定観念は捨て難く、あえてその言葉を使った。セシウム焼肉というと、まるで毒でも食べるような熟語になってしまうが、本文で述べたように、現段階での「セシウム汚染牛」は食用として何の問題もないのである。

であるとすれば、「まじめに物考える人間」というのは、あくまでセシウム牛は有害であり、それを食べようというのは不真面目極まる大ばか者の言い草であると思っているのか、あるいは、焼肉が大嫌いな人種であるか、どちらかであると思わざるをえない。

また、寄せられたコメントの中には、

「”食べよう”大賛成です。ただし、”汚染牛”という言葉には？マークです。セシウムによる深刻な被害はチェルノブイリでも一件もありません。塩昆布など海産物にはセシウムは必ず含まれています。つまり”汚染”ではないのですね。」(友)というものもあった。

汚染というと、「汚されている」「穢されている」「有毒物質が混入している」というイメージがあって、そういうものを食べる気にはなれないというのは、民衆のごく自然な気持ちでもあるだろう。

だが、現今の日本で政治的・経済的混乱と低迷が続く状況の中で、たとえセシウム値が国の定めた基準値を超えているとはいえ、「毎日200g100日間食べ続けても害はない」と複数の学者が明言しているその肉を、すべて焼却処分してしまうおうとする無慈悲で、無節操な国の隠蔽体質をこそ、「まじめに物を考える人間」は糾弾すべきであると思うのである。

国がそうと決めた肉牛を、たとえ闇でも流通させることはもはや不可能である。だが、肉牛飼育の関係者が、断腸の思いで育てた肉牛を自らの手で捌いて、知人友人縁者に贈り、また地域の人たちと食することに、法の枷を嵌めることはあってはならないことであると私は思っている。

「汚染」という言葉は不適切である、といってくれたコメンテーターに対して、なるほど、その言葉を使わなければ、マスコミに影響され易いオバサン方も、少しは違った反応を見せたかもしれないのである。

私たちは、テレビ新聞等の合唱にどうしても影響されてしまう。

マスコミよ、「言いたいことはわかるが言葉遣いに気をつけろ！」

佐伯泰英著『密命』シリーズ第25巻 読後感想

<< 作成日時 : 2011/08/16 16:41 >>

2011年8月16日



待望の上覧剣術大試合

待望の最新刊が出た。「上覧剣術大試合」がこの巻のテーマである。

私は、このシリーズをすべて続けて読んではいしたが、「剣技の研究」シリーズ終了後は、言及を控えていた。

その理由は後に述べるが、長く引っ張っていた「上覧剣術大試合」の場面ともなると、(最終版を予測させるがゆえに)再び取り上げざるを得ないのである。

前二巻ほど前は、この巻を書き上げるためのいわばプレリユードとなっていた。

なにしろ、このシリーズの主人公である金杉惣三郎が、絶対本命と目される息子の清之助を打倒するため、通りすがりにふと見ただけの若き浪人剣客神保桂次郎に惚れ込み、彼を対抗馬に育てるべく家を出奔し共に山中を渉猟して血の滲む修

行に励む、といういわくつきの「大試合」への序章であった。

先の上覧試合の審判を務め、数々の力ある剣客の真剣勝負での挑戦をことごとく退け、当第一の剣客と謳われた惣三郎が、何ヶ月にも亘って、身命を賭して持てる業の全てを叩き込むのであるから、もともと素質のある弟子の桂次郎が無敵の強さを身に付けないはずはない。

尾張藩の出場者

このことだけでも次の興味ある展開を予想させ、続刊を待たされ続けた。

作者はさらに追い討ちをかけるように、予想もしない物語の展開を仕掛けた。

尾張柳生には大試合の出場枠が二人あったが、その内の一人を倒すことによって、尾張柳生からの出場枠の一人として出場する約束を、尾張藩主継友(つぐとも)から取り付ける。

このシリーズを読み続けた人なら、惣三郎が、尾張藩が敵対する現将軍吉宗の懐刀であり、これまで尾張柳生の最強の剣客たちをことごとく屠ってきた宿敵なのである。にもかかわらず、桂次郎が本命の金杉清之助を斃すほどの実力を身に付けているなら、自らの陣営から桂次郎を出場させることが藩の発揚のため必須であると思い、惣三郎の提案を認める。

尾張藩にとっては、屈辱に塗れた身を切るような選択なのであるが、桂次郎の実力を試すために強力な刺客を次々に放っても、ことごとく桂次郎の刃の露となって消える。一種の消去法である。

尾張藩主継友は、最後に残った二人の内の一人を仕留められ、桂次郎を尾張藩の代表の一人に加えるという苦渋の選択を強いられるのである。それも、全ては惣三郎の思惑から出たものであり、その思惑通り息子清之助の対抗馬としての立

場を獲得する。

予定調和の優勝者

これまで惣三郎を支持してきた幕閣の要員を初め、剣友や弟子たち、そして何よりも残された妻と娘二人とその縁者たちは、惣三郎の真意を疑い干路に思い乱れるのであるが、惣三郎の決意は揺るぎがない。

何とも凝りに凝った設定を創り上げたものである。思いもかけない設定であるとしても、余りにも唐突でありアリティに欠けるといわざるをえない。

そうした設定の背後にあるのは、予定調和を覆そうとする作者の苦心の構想である。つまり、清之助を余りの無敵の剣客として描いてきたために、大試合での優勝が当然のごとく予想(読者にとって)されるため、清之助危うしという状況を設定せざるを得なかったということである。

また清之助の活躍の陰に埋没しがちであった父親惣三郎が表舞台に浮上するための手立てが必要であったためでもある。

しかし、どのような奇抜な手立てを講じようと、これまでの物語の展開からするならば、清之助が一敗地に塗れることがあってかならない。とすると、清之助の優勝は予定調和なのであり、読者もそのことは先刻承知である。

ただ、負けることになる惣三郎と神保桂次郎の運命がどう描かれるか、ということに読者の関心は向けられる。

順番からすれば、桂次郎は、準優勝かそれに次ぐ成績で終わることになるはずである。

そのことも全て読者は承知済みなのである。それゆえ、上覧剣術大試合の様相がどのように手に汗握る様子で描かれようと、読者は手に汗握ることなく平然と読

み進むだけである。付け加えるなら、上覧試合も二度目となると二番煎じの感は免れず、様々な趣向が凝らされているにも拘らず感動は薄い。

そうして、予想通り清之助は優勝する。

清廉潔白が仇

敗れた桂次郎と惣三郎の運命は、本を読んでもらうしかない。清之助は、(父親の総三郎を凌ぐ存在として想定されたために)余りにも強すぎる。これが清之助の欠点である。

というより作者の設定のミスである。強すぎる人間に対しては、読者は強烈な関心を抱かない。あまつさえ、清廉潔白で女性(によしょう)を寄せ付けず、極めて礼儀正しく、ひたすらに強い、という絵に描いたような主人公に魅力を感じる読者はいるのだろうか？

三年半の武者修行の間に、数々の魅力的な女と出会うことはあっても、濡れ場となるような場面は皆無である。

濡れ場がないことを残念がっているのではない。作者が致命的とも言うべき設定ミスを犯しており、そのことによって清之助は清廉潔白でなければならないのである。

清之助は三年半にわたる武者修行に際し、国元(江戸)に葉月といういいなづけを残してきているのだ。しかも彼女は清之助の家族同然に金杉家に入出入りしており、清之助の動向の一挙手一投足を情報として把握している。

吉川英治の武蔵像を思い起こさせるが、お通は武蔵のいいなづけでも何でもない。武蔵は、修行一途のためにによしょうを遠ざけようと苦悩するのであり、その心の葛藤は読者に感動を与える。

しかし清之助にはいいなづけがいるのであり、修行一途に励む剣客のイメージにそぐわない。

「秘剣」のまやかし

清之助は、江戸へ帰還した暁には結婚することを楽しみにしており、葉月もそのことを信じて疑いない。このどうしようもない甘さ、予定調和が、清之助へのひいては彼が登場する巻に対して同情と思い入れ、すなわち感情移入を阻むのである。

さらに決定的なことがある。

彼が会得した剣法のことである。それは「秘剣霜夜炎返し(ひけんそうやほむらかえし)」と呼ばれる。

どういう業かというと、水平に抜き打った刀を頭上に振り上げ、スイと垂直に振り下ろすだけのものである。これは、居合でいう初発刀という業で、業の基本とされ同時に奥義とされるものである。

これだけなら何ということもないが、ただ清之助のこの秘剣には尾鱗が付いている。刀を抜き付けた瞬間、刃に一丈ほどの高さの炎が上がるというのである。

相手が炎に驚愕している間に、剣は頭上に振り被られスイと振り下ろされた時は、相手は真っ二つになっているという趣向である。

炎の発する刀を頭上に構えたときの状況を作者は、
「寒夜、囲炉裏端で夜鍋仕事する女の手から針が零れた。針穴を糸がすべる音さえ聞こえる静寂の夜、新藤五綱光(清之助の拝刀)が針と化し世界を支配した。」(57ページ)

と描いている。

刀は何の抵抗もなく相手の頭上へ吸い込まれて行く。これこそ漫画的趣向でなく

て何であろう！

父の剣技の迫真性

血の滲む修行を重ねた真の剣客にあってはならない状況である。もしそのようなことが起こりうるというのであれば、彼はナズナ遣い(妖術師)というべきであって、剣術遣いとはいいがたい。

妖術と言ってもいいこの「秘剣」が清之助に対する剣客としての信憑性を阻害している。

父惣三郎は、「寒月霞斬り(かんげつかすみぎり)」という秘剣を発明し敵をことごとく屠ってきたが、その剣理は肯首できるものである。

夜、川の流れに腰まで浸かり、水底に届くばかりに下段に構えた刀を川面に浮かぶ月映を真っ二つに斬り上げるというものである。

眼目は月を斬ることではない。水中から刀を斬り上げることを際限なく繰り返すことによって、水の抵抗と格闘することになり、刀勢が異様に速くなるわけである。

刀が動いたと思った瞬間にすでに相手は斜め下から斬り上げられており、それでも不十分な場合は、振り上げられた刀は瞬時に振り下ろされ、相手の反撃の隙を許さない。

この「秘剣」は、現実にも鍛錬の仕方によっては会得しうるものであり、惣三郎の活躍に感情移入することが可能である。

それゆえ、惣三郎が活躍する14,5巻までは十分剣客小説として楽しめたのであるが、清之助が表立って活躍する段になると、彼の超人的活躍にも関わらず、極端に面白みを減じてしまう。

私は、『密命』の剣技研究をこのブログで数回にわたって連載したほどであるから、愛読者を裏切るにも等しい清之助の登場のさせ方に少しばかりがっかりしている。

京ことば『源氏物語』全五十四帖連続語り第十三回

<< 作成日時 : 2011/09/03 17:48 >>

2011年9月3日



怪我の功名

8月7日の公演からはや一月が経とうとしている。

病気で寝ていたわけでもないのに、記事を書くことが出来なかった怠慢は弁解の余地がない。

一月前の公演の様子を思い起こしながら、気持ちを改めて記事を書くことにしよう。

前回の公演時(6月19日)語り部山下さんは左足首を骨折して、足首に包帯を巻き、付き添いの女性に身体を支えられながらの痛々しい姿で登壇されたが、すでに二月も経ったその日足を引きずることもなく何事もない様子であったことにまず

安心した。

私はというと、(すでに前の記事で報告しておいたことだが)二ヶ月前の公演の打ち上げ懇親会の後、地元の駅から自転車で帰宅途中に魔の坂道で転倒し、右の肘をコンクリートの道に打ち付けしたたかに傷を負ったのであった。ほとんど骨が見えんばかりに肘の皮膚が三箇所にわたって抉り取られていた。

二ヵ月後の7日の公演のとき、傷は未だ癒えず作務衣の袖の下にネット包帯を巻き付けて傷を隠していた。

傷はいわば、類稀なる大荒れの天候で、源氏やその周辺の人たちをパニックに陥れた「明石」の巻のその余韻とでもいうべきもので、名誉の負傷(?)として長く記憶に残るものとなるはずである。

「濡標」の粗筋

前置きはこれ位にして、第十三回「濡標(みおつくし)」の巻の語りの模様を述べることにしよう。

客席に入ってみると、ステージの左隅に表具去れた一幅の華麗な絵巻物が飾ってある。

登壇した山下さんの説明によると、「風神雷神」図で有名な俵屋宗達が描いた絵巻の一部であるとのこと。その華麗で精密な描写はさすが宗達！とうならされるほどの見事な出来映えである。

絵巻の内容については後述することにして、この帖の粗筋を、会場で手渡されたチラシから引用しておきたい。

「京に戻った源氏は、亡き父桐壺院追善の法要を営む。

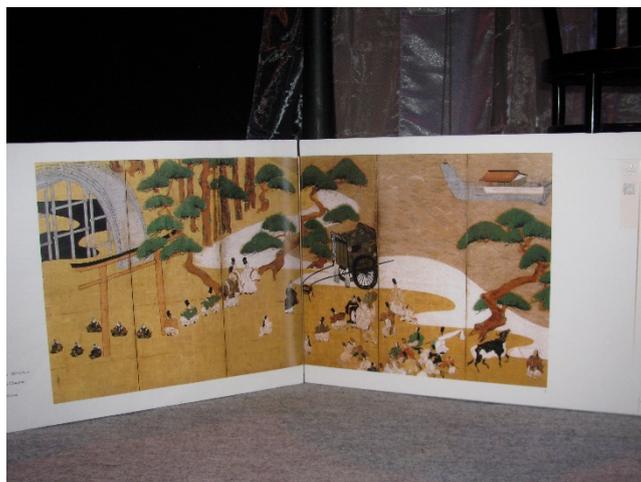
翌年二月、源氏は冷泉帝(実は源氏と藤壺との間にできた子)の即位に伴い内大臣となる。葵の上の父も摂政太政大臣となり、源氏一門に再び春が巡ってきた。

三月、明石の君が女兒を出産、この御子は将来後の位につくとの宿曜師のかつての予言から、源氏は高貴な出生の乳母を選び遣わす。子のない紫の上は嫉妬の情を訴える。

五月、源氏は明石姫の五十日の祝いを贈り、明石君の心を慰む。源氏は花散里を訪ね、また五節の君や朧月夜への思いも断ち切れないが逢うことはままならない。入道の宮藤壺は准太上天皇の待遇を受ける。

秋、源氏は願果たした住吉神社に参詣、そこに明石君一行も来合わせた。目もくらむような源氏の威勢に我が身の程を痛感した明石は遠慮する。それと知った源氏は二人の縁の深さを思い、明石の君の上京を促すが、気後れをする明石の君の決心はつかない。

齋宮交代により帰京した六条御息所は病の為に尼となり、見舞った源氏に娘の後見を託して亡くなる。朱雀院は前齋宮に求愛するが、この娘を手放しがたい源氏は、藤壺の宮の助言を仰ぎ、前齋宮を幼女として冷泉帝の後宮に入内させることを考える。」



俵屋宗達の絵巻

さて、前述した絵巻の内容に戻ろう。

絵柄は源氏が大勢のお供を引き連れて住吉神社に参詣した時の様子が描かれている。

平安時代最盛期の貴族やお供の衣装の華麗さ豪華さは、類を見ないものである。かつて源氏が凋落した折、官職を解かれたお供は全て復権しあるいは位が上に進んで、目にも鮮やかな華麗な衣装を身にまとっている。

源氏が乗る牛車は中央に描かれ、片隅からその様子を覗き見る明石の君の一行は、明確に描かれてはいない。式部の文章でその豪華絢爛な様子は十分に描写されて入るものの、絵はその一幅で余すところなく描き尽くす。

自らの子を出産した明石の君に対する執着は並々ならぬものがあり、最愛の妻紫の上に明石で子を設けたことを告白する。源氏の浮気症を十分に心得ているはずの紫が、ことさらに嫉妬して打ち沈むあたりの描写は、まるで現代小説を読んでいるように生々しくリアリティがある。

語り部山下さんもそのくだりを朗読する時、心なしか気持ちが打ち沈み、紫の上に心から同情しているように思われる朗読の仕方であった。

そのくだしすらも、私は夢界に意識が差し込んだ状態で聞いており、覚醒した意識以上に胸に染み入ってくるのである。

源氏が生きた時代は(封建時代を通して)、女性は権勢のある男たちの意のままであり、一夫多妻制に否応なく甘んじていた感があるが、人間の感情まで制御することは出来ない。

源氏がいかにかにすっ呆けようと、紫の上の嫉妬の感情は当然のものであり、それ

からの二人の生活に根深いしこりを残さないはずはない。そうした女の哀しい性ともいうべき感情をしっかりと書き込んでいるところに、源氏物語が不朽の名作といわれる所以があるのである。

一見男のわがままが社会制度上許されているかに見える封建時代であっても、男は男女は女であり、その感情の発露は現代といささかも変わらないことを確認することが出来る。



勝海舟と妻お民

蛇足かもしれないが、幕末の英雄勝海舟とその妻お民のことについて、少し述べておきたい。

「英雄色を好む」という言葉があるとおり、海舟は妻を持った後も幾人もの女性を公然と愛した。その内の女の一人糸は氷川にある宅の別棟に住まわせ、食事をするときは正妻民と共に同じ食卓へ付かせたという。また糸は海舟の子を生んでいる。

民は文句一つ言うでもなく、糸と母屋ですれ違ったときなど、優しく微笑んで挨拶を返していたという。正妻民は「よくできた婦人で、良妻賢母であつたらしく、勝家の家政を取り仕切ったことを皆がほめている。」(勝部真長『勝海舟』)というほどの夫人であつた。

しかし、海舟の死後も生き残つた民は、遺言で夫の海舟とは同じ墓に入りたくないと言つて書き残した。

それにも拘らず民の切実な遺言は無視され、死後洗足池の辺に夫の勝と並べ葬られた。民はさぞ無念だつたことであろう。

制度がどのようなものであれ、親密な情を交わした夫に情人がいて欲しくない、というのはごく自然な感情であり、ましてや同じ家屋に同居するなどは耐え難いことであつたと思われる。一夫多妻が公認されているイスラム教徒の夫婦も、思いは同じであろう。

浮気心を抑えられた源氏

どのようなことが起こつても、源氏の女に対する浮気の虫は収まることはない。

伊勢から務めを終えて帰つた六条御息所の娘の齋宮に源氏は浮気の虫を掻き立てられる。何とか物にしたいと考えるが、源氏の助平心を熟知している母の御息所は死の床で、決して娘に手を出さないように釘を刺すのであつた。

さすがの源氏も遺言ともいふべきかつての愛人の言葉に逆らうことは出来ず、齋宮に関心を寄せる先帝の意向を無視して、現帝である冷泉帝の側に仕えさせることにするのである。

源氏としては断腸の思いでの決断であつた。

すべてが意のままになるのであれば面白いことは何もない。権勢や制度や力ず

くのごり押しを超えたところで発露される、女としての、人間としての感情こそが、
結局は真実の物語を造り上げていくのである。

テレビが飽きられる日

<< 作成日時 : 2011/09/09 22:57 >>

2011年9月9日

品位を下げるお笑いタレント番組

今テレビが面白くないと巷で呟かれている。

民放は安く使えるお笑いタレントを総動員して、自分たちだけで騒々しく喋りまくり、げらげら笑って品を落とすだけのどうでもいいバラエティ番組に墮してしまっている。

頼みのNHKは、度を越えた番組宣伝と再放送でお茶を濁しており、テレビのスイッチを入れた視聴者は、溜息をつきながらスイッチを消してしまう。

ましてや、韓国の企業に乗っ取られたある民放が韓流ドラマのオンパレードを繰り出し、日韓対抗のサッカー試合を韓日試合と呼ぶにいたっては何をかいわんやである。

視聴者が番組を観ないからスポンサーが付かず、製作に費用を掛けられないので、安く使える二流三流のお笑いタレントを使った安易な番組に走らざるを得ず、さらに視聴者離れを招く悪循環に陥っているというわけである。

「お笑いタレント」といわれる素人に毛が生えたような若者たちを量産する吉本興業などは、テレビの品位を下げ視聴者離れに拍車をかけることになった元凶と言っているが、吉本興業の財力人力攻勢に屈服した感のある民放各社にこそ、テレビをつまらなくしている責任があることはいうまでもない。民放はタレントを食べさせるための番組かと言いたいほどである。

欺瞞に満ちた試合開始時間

民放がコマーシャル放送によって成り立っていることは止む終えないこととしても、余りにもその回数が多いため、視聴者はチャンネルを切り替えあるいは無音にしてしまうことは、当然のことなのである。

サッカーなどの実況放送にそうしたことは顕著である。

たとえば、7時にキックオフとなる試合の実況は、6時半放送開始と新聞の番組欄に書かれる。

早く試合を観たいと意気込む人は6時半にそのチャンネルに合わせ、今か今かとキックオフの瞬間を待ち続ける。ところが、過去の試合や選手の素顔といった内容をチラリと流し、「間もなくキックオフです！」と今すぐにでも試合が始まるようなコメントを発しておいてコマーシャルがえんえんと始まる。

視聴者は馬鹿面をして見たくもないコマーシャルを見せつけられるという構図である。

そのことで騙され続けてきた視聴者は、無音にしたりほかの番組に切り替えたりしてその長い長い時間をひたすらに待ち続けるわけである。

番組側と視聴者の我慢比べといったところである。そのうちキックオフが7時であることが視聴者には分かってくる。であれば、その間チャンネルを別の局に切り替え、7時まで待てば良いわけで、イラつくことは免れないが害があるわけではない。

高揚した感情の突然の遮断

番組に対するコマーシャルの割り込みを<害>と感ずるのは主にドラマや映画の放送中である。

一本のドラマないし映画にコマーシャルが何本入るかはあらかじめ決まっている

のであろうが、その頻度が余りにも多く、物語の流れを遮断してしまうことが問題なのである。

20年ほど前にこのことがマスコミの間で議論されたことがあった。内容の進行につれて視聴者の感情が高ぶり、あるいは次の瞬間にはどうなるのだろうとワクワクドキドキして見守っている時、場面はふつりとコマーシャルによって切断されてしまうのである。そのときに味合う無念さ悔しさはほとんどの人が経験済みであると思う。

途中にコマーシャルが入るから、トイレに行ったり酒を注ぎ足しに行ったりお茶を入れたりすることが出来るからそれはそれで良い、などと言っている問題ではないのである。

自然に発露する感情をいきなりぶった切られるのである。そのことが子供の感情構造に与える影響が懸念され議論になったわけである。

ぶっちぎれ易い、怒りっぽい、思考に持続性がない、などという現代の子供の特徴と結び付けられたが、そのうち議論は尻切れトンボに終わってしまい、今でも高揚した場面でのコマーシャルの割り込みは是正されていない。

考えてみれば、局のほとんどが大新聞の傘下であり、いってみれば、自らの局の放送を不利にしかねないそうした議論を持続させる訳がないのである。一刻でも早くそうした議論に蓋をしたいというのが本音であろう。

しかし、子供に止まらず、コマーシャルによる突然の感情の遮断は、大人にも影響を及ぼすと考えても良い。というより、子供時代からそうした洗礼を受けて大人になった若者の感情の発露や思考方法に多大な影響を与えていると断言してよいと思う。

なぜトリュフォーは激怒したか？

話しの方向が少しずれるが、かつてこういうことがあった。

1960年代のフランスヌーベルバーグの騎手の一人とされた映画監督フランソワーズ・トリュフォーが来日した折、自分の映画が日本のテレビ番組で放映されていたのを観て激怒したということがあった。

なぜかという、放送時間に合わせて内容がカットされそこにコマーシャルが差し挟まれていたからである。彼は、自分の映画を二度と日本のテレビに流させないと言ったといわれる。

むろん、ノーカット・ノーコマーシャルの場合は別であろうが、日本のテレビ局がいかに無神経に一個の作品をいじくりまわし、汚染された商業主義に毒されているかを公けにさらけ出したエピソードといえる。

この体質が滲み込んだまま今のテレビは存続している。番組の製作者たちは、出来るだけ感情の高ぶりを遮断することのない方法で、コマーシャルを入れることに専心すべきである。そうした努力が文化の成熟に繋がるのである。

かつて評論家大宅壮一が言った「一億総白痴化」を予言とさせてはならない。

テレビ局は、視聴者の思考の熟成とのびのびとした感情の発露を促す番組を製作する義務がある。テレビはその力を持っているのである。

江戸城本丸を富士山ろくに建てよ

<< 作成日時 : 2011/09/10 01:29 >>

2011年9月9日

焼失した江戸城本丸

数日前の読売新聞に、江戸城再建運動の記事が出ていたので、記事に刺激されて私論を述べてみたいと思う。20年ほど前であったか、松竹が創立100周年を記念して論文を募集したことがあった。私はそれに応募して、30枚ほどの文章を書いた。見事落選したのであったが、そのときのタイトルが表題だったのである。この説は未だに変わってはならず、論文の主旨をなぞってみたい。

江戸城本丸は周知のごとく、1657年の明暦の大火によって焼失し以後再建されることはなかった。大阪城をはるかに凌ぐ五層の大建築であった。その姿は絵巻などに残っているが、基礎だけ残って跡形もないため、その雄姿を一目見たいと多くの人たちが願うのはもったもなことである。

しかし、現在の本丸跡に再建するということになると、皇居の敷地内であり問題ありと言わざるをえない。昔存在していたところに再建されるのが最良ではあるが、その雄姿が見られるのであれば、必ずしも場所に拘ることはないと思う。

世界に発信する一大観光地

そこで思い付いたのが富士山麓である。オウム真理教で名が轟いた上九一色村辺りは富士山をまじかに望む風光といい、敷地の広大さといい、また東京からそう遠くない土地柄といい、建設候補の一等地であると思うのである。ただ、江戸城を再建するだけではない。江戸城を中心に江戸を再現するのである！

むろん、江戸八百八町をそっくり再現するというのではない。城下町の一部を再現すればいいのである。

特に江戸は縦横に堀が張り巡らされた水郷都市である。その一端を再現しかつ町家大名屋敷の一部を配分すればそれに越したことはない。

そうして、ここを世界に発信する一大観光地とし、大いに外貨を稼ぐドル箱とする、いやすべきであると考える。

類似した施設は日光江戸村など幾つかあるが、どれも規模が小さくまた江戸の本来の町の風情を体現することから程遠い。また筑波近郊には時代劇専用のロケを想定した規模の大きい江戸時代を模した施設があるが、これも部分的であり世界に通用する観光地とはお世辞にもいえない。

私の構想からすれば、単に施設を建設するというだけではない。江戸そっくりの町に江戸時代の身形をした人たちが住むのである。その町に入れば江戸そのものとなるという規模なのである。

外から見れば江戸そのものであるが、むろん現代に住んでいるからには、巧妙に外には分からない設計のもとに、部屋の中にはテレビ、冷蔵庫、ガスコンロ、空調機などが設置出来るようにして、そこに暮らすことになる人たちの利便性を図る。現代人が住むからには、生活様式も江戸そのものというわけにはいかない。観光地として解放するある時間帯だけ江戸そのものとなるのである。しかし、一部は、内部もそっくり江戸時代という施設が必要になることは申すまでもない。

時代劇の一大ロケ地

さらにそこにはもう一つの思惑がある。

町全体が時代劇のロケ地となるということである。いま時代劇を観ていると、京都

の太秦(うずまさ)、筑波の NHK 専用のロケ地、その他各地の城下町や社寺、街道筋など部分的に「江戸」が使われているが、見たような場所が頻出しリアリティを損なっている。

江戸城本丸を初めとその城下の一部が大々的に再現されるということになると、日本全土から観光客が集まるだけでなく、外国からもそれを目指して日本にたくさんの人たちがやって来ることは必定である。

日本の古き良き時代を期待してやってきた外国人たちが、京都の駅舎を見てまず失望することから日本旅行が始まるという構図は悲劇的である。

その町には駅舎は建設しない。観光客はバスか車でやってくることしか出来ない。大川(多少規模は小さくても構わない)を挟んだ日本橋を渡ることからワンダーランドは始まる。

こうした発想から生まれた江戸の町造りによって、思い切った時代劇の制作が可能となり、大規模で奥行きが深い時代劇が次々と生まれる可能性がある。

これは国家のプロジェクトであるべきである。暮らす人たちは国家公務員であり、江戸時代人として日常を装う(髪型、服装等)代価に相応の給料を貰う。

日本再生は大地震と原発で罹災した地域から始めなければならないが、富士山麓に江戸を再現するという案に夢を込めることはあながち不可能ではない気がしている。

創美流華道会館での刀道講座

<< 作成日時 : 2011/10/10 17:40 >>

2011年10月10日



人を切ることと花を切ること

この記事は前項『文武両道塾御嶽山合宿』の続編である。そのことは記事の終わりに述べておいた。

この講座は『伝統文化 芸術 指導者育成教室』のタイトルの下に、創美流華道家元渡辺華靖先生を中心に結成された大多摩華道連盟の主催である。

文化庁の後押しを受けた事業で、各界の著名な先生方によって、ほぼ毎月一回10回に亘って、東村山市にある創美流華道会館において行われている。

名誉なことに私は第三回目の講師として招聘された。合宿終了日の9月25日のことである。講演の題名は「人を切ることと花を切ること」というものである。タイトルは主催者によって勝手に命名された。

私は真剣刀法の習得に励んではいるが、未だかつて人を斬ったことはなくあたりまえのことなのだが)、題名のおどろおどろしさにたじろぎつつ、主催者の挑発的な意図に気づき唖らされた次第である。

「人を斬ること」と「花をきること」とは同列には扱えない。生き物の命を絶つということでは同列かもしれないが、次元が違う。それを同列として題名としたところに主催者側の意図を感じるのである。

答えを見付けなければならない。合宿中もずっとそのことを考えていた。

人を斬るという無惨な現実

25日の朝10時みんな揃って宿舎の御嶽山荘を出てケーブルカーで地上に下り、電車で一路東村山に向かうことにした。みんな疲れ果てて電車の中で居眠りしている。私とTさんだけは電車の中で缶ビールのロング缶を呑んで意気軒高である。

開始時間の3時まで時間が少し余っていたので、昼食を摂り喫茶店で時間をやり過ごした。三時少し前総勢5人で華道会館に到着。講演のため直ちに稽古衣に着替える。家元に案内されて会場へ。

ここは以前文武両道塾を挙げて家元から華道の講習を受けた所であるので馴染み深い。真剣と居合刀をテーブルに並べ話を始める。

華道会館ということもあってか、女性の受講者が多い。題名の解題を行わなければならない。まず、

「私は幸か不幸か、人を斬った経験はありません」と半畳を入れておいて、

「人を斬るということは、斬られるということであり、殺すということは殺されることでもある。」と話を切り出す。

「人を斬るということはまさに殺人であるが、暗殺や辻斬りに止まらず、果し合い、処刑としての斬首等方法は多岐に亘っている。

刀で人を斬るということは、銃とは違って死体の状況は残酷なものといえる。首を無くした死体からは血が奔騰し、腹を斬られて内臓が露出し、腕を切り落とされて悶え苦しんだ後に絶命するのである。

斬った人間は嫌でもそうした状況と対面しなければならない。斬首を行う役人は別として、立会いに臨んでたとえ勝ちを得ても、無惨な姿をして横たわる相手は一步間違えば自分の姿でもあったはずある。

まさに相手の死が自分の姿でもある真剣勝負のリアルな現実がそこにあるのだ。常に死を覚悟して初めて生と向き合うことが出来るすさまじいばかりの現実である。

文明は必ず滅びる

ところが、欧米人が発明した銃器による殺人は、基本的には相手の死のリアルな姿と対面することはない。

間近な場所での発砲は別としても、近代戦争での銃器による殺人は最早相手を見ることはない。

銃器は大砲、ミサイルと進化し、ついには核兵器に到達した。広島長崎で原爆を投下した敵方は、巨大なきのこ雲を見るだけなのである。

そこには剣で相手を斬殺した時に味合うはずの恐怖と感動は存在しない。

文明の興亡は、兵器の発達と深い関係にある。より強力な武器を発明開発した民族が世界を支配してきた。文明の発達というのは兵器の発達でもあるのだ。

そうして現在、核兵器という最強の兵器を所有する欧米人が世界を支配している。

しかしそれは同時に滅亡への序章でもあるのだ。必ずしも核兵器を上回る全く新しい型の兵器を開発した民族なり国なりが、次の文明の支配者になるということではない。場合によっては自らをも滅ぼしかねない究極の兵器を手中にした欧米文明は、行き詰まってしまったのである。

その後にあるのは個々の人間をはぐくみ育てる文化への回帰と人間精神の洗練化しかないのである。

文化とは、手取り足取して一対一で向き合って伝えてゆくものであり、日本の伝統文化の一つである剣術こそ、核兵器の後に連綿と受け継がれ世界に発信するに値する奥深い精神性を備えた術技なのである。」

切られた草花の蘇生

と述べたところで本題が大きく逸脱してきたことに気付いた。

花だ、花について述べなければならない。

「花を切るということはどういうことか？」

それは花の命を絶つことであるが、また生かすことでもある。自然のままの位置にあった草花が刃物で断たれることによって場所を移し、生けられることによって

また別の美に再現されるのである。「花を切るということ」は、花の命を別の人工的な場所へ移し変えて再び甦らせる行為ではないだろうか。

華道については素人だが、華道のエッセンスはこのようなものとして自分は理解している。

こう考えてみると、驚愕、感動、精神の震えということでは、人を斬ることと花を切ることとは共通する部分があるが、次元での質的な違いがあるといわざるを得ない。」

と結論付けざるを得ないのであった。

華道の側での主催だからといって、その関連づけに拘る必要はないのであるが、主催者側に仕掛けられた解く作業は最低限でも必要である。

日本刀を体感してもらう

一応、私なりに解題しておいて、刀道とは何か、刀術の歴史、古流派の説明、現代隆盛を見ている居合道、抜刀道などと刀道との違いを解説し、また各流派の刀の構え方斬り方などを述べ、ビール缶の空缶の上に載せたリングとゆで卵を、刃引きの居合刀で水平抜き打ちに両断するパフォーマンスを行った。

その次は、いよいよ空缶本体の登場である。缶は刃引きの居合刀では斬れないから真剣を使うしかない。

500ミリのロング缶を楯に並べて立てておいて、抜き打ちの袈裟。幸いに見事に両断でき日本刀の切れ味を受講者に体感してもらうことが出来た。

次は、抜き身の刀を手にとって見てもらうことが日本刀理解に必要なことと思い、受講者全てに実際に手に取って鑑賞してもらった。

これは大サービスというべきで、他の剣術家は絶対にといいほど自分の差

し料を不特定多数の人の手に委ねるといことはしない。

しかし私は違う。刀術を、日本刀を、理解してもらうためにはそういうことが必要であると考えている。今後も機会がある度に、進んで自分の刀を不特定多数の人の手に委ねるだろう。自分の目の前で目を光らせて動作を監視していれば、事故が起きる心配はまずない。



普段の私ともう一人の私

あと質疑応答がありこれで終わりというときに、資料として配られた私の経歴を見た受講者が、詞の即興朗唱ということに目をつけ、今ここでやってくれないか、とい

う難題を持ちかけてきた。

「難題」とあえていうのは、わたしの詩即興朗唱は十分にアルコールが体内に取り込まれて初めてスイッチが入るからである。

「私の内部に二人の人間が居て、一人は普段の私、もう一人は朗唱係ともいうべき存在である。

公演の場所では出番を待つ普段の私はアルコールをどんどん飲んで足がふらつくほどに酩酊する。そのとき友人や観客と話しをしていてもろれつがまわらないほどであるのだが、そうした状態になった時初めてもう一人の私である朗唱係に自分を受け渡してしまう。

「もう私は歩くのもしんどいので、あんたが私の代わりにやってくれ、頼むよ」

というと朗唱係は無条件で引き受けてくれる。

ステージへ向かう私の足取りは微動場にもせず、はっきりとした言葉ですらすらと即興をやりおおせてくれるのである。

即興係がどういう存在であるのか私は知ろうとは思わない。それが私であることは確かであるが、<彼>がある日私の心の中に登場した瞬間のことは明確に憶えている。そのことを説明していると長くなるので、機会があれば述べることもあると思う。

花神をテーマとしたし即興朗唱

終了後階下で懇親会が催され、アルコールを体内に取り入れる機会がやってきた。

むろん質問者(女性)も同席しており、いつスイッチが入るのかをそれとなく観察している様子が覗える。もう後には引けない。

日本酒をぐびぐびといただき、その時に備える。五合ほどもいただいたところで、朗唱係がゴーサインを出した。

参会者に題を求める。私の刀道の弟弟子でもあり友人でもある T 氏がテーマとして花神ということを行った。

数秒置いて言葉を発し始める。

「生きるとは何か？生きるとはどういうことか？」

とまずごく自然に言葉が喉にこみ上げる。

「我々はこの地球で自然界の支配者として君臨しているが、基本的には我々人間も動物という自然界の一員であり、地球という惑星の下で、山川草木と同等な存在に他ならない。

生きるということは生かされているということであり、山川草木が私たちの命を守ってくれており、私たちは山川草木そのものである。

おお、大宇宙に漲る命の種子が地球という惑星に到達し命が生まれた！

何億年前の樹木や生物が私たちの共通の祖先である。

そうして今、自然の只中に突っ立つ私の横で風になびいている草花は、私に命を吹き込む神でもあるものとしてそこにある。」

といったようなことを即興朗唱した。

何一つ、淀みがなく障害がなく、朗唱係は完璧に役割を演じてくれた。またもう一合ほど日本酒をいただき帰ることになった。

足元はふらついているが、重い刀とリュックも持ち歩いてくれる弟子たちは帰って

しまってもういない。どうして家に帰ってきたかも記憶していない状況で、ちゃんと刀とリュックを持って帰ってきていたから、これからはどうしようもなく酔っ払った時は、私の内部の三人目の荷物係に荷を預けることにしようと思っている。

文武両道塾御嶽山合宿

<< 作成日時 : 2011/10/10 00:22 >>

2011年10月2日





武蔵御嶽神社の献額

9月23,24,25日の三日間、文武両道塾の合宿を青梅の御嶽山で行った。

関東の東の守りを束ねる武蔵総社として家康が重要観し、一般の信仰を集めてきた武蔵御嶽神社は、私にとって思いで深い場所である。

まず、神社の拝殿横には、10年前に、私が所属する全日本刀道連盟の最高顧問(4年前に物故)阿部雅司先生の尽力で奉納された流派献額が掲げられている。

刀道だけではなく、阿部先生が継承された甲源一刀流を筆頭に、地域の剣術流派が網羅され、そこに記された姓名は100人ほどにも達する。奉納式の後に宮司が経営する宿坊「丸山荘」で大宴会が催された。

山に籠って修行

それから二年後、私は一念発起しその宿坊を宿として一週間の予定で山に籠ることにした。

離れの一室を借り朝五時に起床して朝食を摂り、居合刀とおにぎり二個、ペットボトルに入れた麦茶だけを身に付け、一日中山巡りをする修行に出た。

まず山頂の拝殿前で居合刀を用いて素振りと型の稽古を30分ほど行う。その頃にやっと濃い桃色の曙光が見晴るかす山々の彼方に薄い帯を作る。曙光に包まれるようにして、拝殿を下り山道に入って奥滝のある場所に向かう。

鎖にすがったりして急な斜面を下り、滝のある場所に40分程歩いて辿り着く。そこで素っ裸になり滝に打たれる。何百年前から修験者たちが打たれてきた由緒ある奥滝である。8月の夏の盛りとはいっても水は身を切るように冷たく、2分と滝の下にたつてはいられないほどである。

知っている限りのありとあらゆる呪文やお題目を唱え続けなければ、立っていることさえできないのだ。無宗教の私は、波妙法蓮華経、南無阿弥陀仏、臨兵闘者皆陣列在前など憶えているお題目を見境なく称え、挙句の果てにはキリストが十字架上で最後に呟いたという「神よなどて我をみ捨て給いし」などという言葉で叫んでしまうほどである。

何かを叫んでいなければ、滝に押し潰されてしまう気がしてくるのだ。そうして禊を受けた冷え切った身体を滝から出すと、体中から湯気が出て、冷え切っていたと思われた身体はむしろ暖かく感じられるのである。

岩場で身体を拭き衣服をまとい、弁当と居合刀を担いで付近の山々を巡る。

どんなに苦しくても5時までは山中に止まることにして、陽が沈みかけた頃宿に帰ってゆく。

汗みどろになった身体を拭って6時から食事。宿にはあらかじめ注文しておいて魚肉は一切無しの精進料理である。

夜は、図書館から借り出しておいた原文の『義経記』をひたすらに読むのみ。むろん、TV ラジオ等は一切なく携帯も持参していない。下界とは遮断しての修行である。

二時間も本を読んでいると眠くなってくる。そうして翌朝5時起床。その繰り返しを一週間続けた。

翌朝は下山するという日なっても疲れは全くなくせめてもう一週間居たいという気持ちが先行する。下界での約束事などがあるのでやむなく山を下りたが、人生観を変えるほどの貴重な一週間であった。

合宿日の藁運び

この山にはそうした思いがぎっしりと詰まっているのである。

弟子たちに滝に打たれる経験をさせようと思ったのであるが、夏は暑いから嫌だという意見が大勢であったので、一月後の9月の終わりにしたのである。

修行の意味が薄れた合宿ということになったが、原則としては修行は個々人で決行するものであるから、やがて私をはるかに凌ぐ修行日程で山に籠る弟子が現われるであろうことは予測するまでもない。

御嶽山での合宿は巻き藁の試斬を行うので、畳表を巻いて紐で縛り2日間水に浸けたものを70本も持ってゆくので、その準備作業が大変である。

師範代の立場にあるKさんは生憎合宿の全日程に参加できず泊りは無かったのであるが、朝早く日野の本部道場に車で駆けつけてくれ、70本の藁を小分けして車に積み込み、私を助手席に乗せて御嶽に向かった。

他の参加者は日野から電車で御嶽駅に同時に向かう。

行楽日和の土曜日の朝とあって、若干の渋滞に巻き込まれたが、予定の10時を40分ほど遅れただけでロープウェイ駅に辿り着いた。

駅の駐車場では宿である御嶽山荘の若主人が待っていてくれ、自分のバンに藁を積み替え、山の中腹にある稽古場のビジターセンターに運び込んでくれ

た。関係者以外は車で山に上ることは出来ないのである。

第一日目の稽古

ケーブルカーを利用して山に上り、ビジターセンターに着いたのは11時過ぎ。宿の主人によって藁はすでにそこに運び込まれている。

即座に稽古を始めることにして稽古義に着替え、まずこの山を統べる神々に向かって挨拶をすることにした。

入り口の扉を開け放つと、行方の山頂に神社の屋根が小さく見える。

我々はその方向に正座して座り、師範代がまず「黙想！」と声を掛け各人が心の中で願いや祈りを祈願する。それが約一分続き、師範代から「武蔵御嶽神社の神々に対して礼！」と大声を張り上げ、私たちは深々と平伏して、各自願い事を心の中で称える。

修行や稽古とは関係の無い唱え事をして（例えば、チラチラとこちらを見る職場の彼女と交際できないものかとか、思わぬ大金が転がり込んできますように、とかといった世俗的な願いは聞き入れられるはずもないのでえあるが）稽古はその儀式の後に始まる。

この日集った参加者は11月の昇段審査を控えている人たちばかりなので、主に審査項目に合わせた稽古を行った。

昼になると宿から昼飯のおにぎりが届けられる。御嶽の山系を眺めながら食べるおにぎりの味は、例えようもなく美味である。

午後からは持ち込んだ巻き藁の試斬。藁の質が良くて意外に固く（使い込んだ畳表の場合は磨り減っているので柔らかくて斬り易いのである）、皆両断に難渋している様子がありありである。

しかし、稽古は固く引き締まった藁の方が良いことは自明である。そういう藁で稽古していると審査の場で斬り損じることがない。

5時に後片付けをして終了。木下さんは後ろ髪を引かれる表情をありありと浮かべて山を下りて行った。お疲れ様。



フランス人弟子の悩み

それぞれ刀を担いで宿に向かう。

20代から50代までの差がある参加者に精進料理を奨めることは無意味といってよい。皆ボリュームのある食事に舌鼓を打ち、酒を飲んで一日の疲れを癒す。

宿に止る楽しみの一つはこの食事にある。宿の食事を食すると、あらゆる悩みや囚われから解放され、意識を失ってしまうくらい美味しく食べられる。

食事を堪能した後は部屋へ引き取ってまた酒盛りとなる。参加者にフランス人がいて、まだ日本語をほとんど解しないが、彼は英語を流暢に話すことができ、参加者の T 君は日本人であるが英語が堪能で、フランス人 J 君の通訳を買って出してくれた。

そこでJ君が喋ったことを聞いて半ば愕然としたのであった。

というのも、彼が、普段の稽古で分かっていると思っていたJはずの用語や技法の半分ほどしか理解していなかったからである。その分だけ彼にはハンディが科せられていたわけであり、悩んでいたということになる。

通訳をしてくれたT君のお蔭で、私はフランス人J君の言い分をことごとく聞き届けて納得でき、彼の参加は実に有意義なものであったと改めて思った次第である。

二時ごろまで話し合いが続き時には激した口調にもなり、同じ部屋で寝ている人たちには、さぞかし迷惑なことであってであろう。大いびきをかいて寝ていた人がしばしばいびきを止めたほどであったか、会話が気になって眠りが妨げられた証拠といえる。





本殿の参拝

翌朝は八時起床。朝食後全員で神社本殿の参拝に向かう。

すでに登山客が多数上ってくるのに出くわす。犬を連れた登山客が多いのは、神社本殿からさらに奥まった場所に狼神社が祭られており(大岳山の登山口)、その名にちなんで飼い犬のお祓いを受けるためであるとのことである。

8年前の山籠りのときははすいすいと登ったのに、70歳になった今はぜいぜいと息をつく体たらくである。

数日前の台風で山にも被害があり、拝殿に向かう石段を遮るようにして大木が倒れ込んだりしている。

この山のご神体とも言うべき巨大なケヤキ(直径5メートル)は健在で、1200年間風説に耐えてきた姿を堂々と聳え経たせている。

拝殿に辿り着き参拝。10年前の献額は風説を感じさせて古色を帯びているが、この神社が存続する限り何百年でもそこにあり続けるのである。私の名も刻まれており、弟子に説明する折に多少の誇らしさと高揚を感じた。

宝物殿にも立ち寄り、源平合戦で大活躍をした畠山重忠の赤糸絨(おどし)の

大鎧と10年ぶりに対面する。一時間後、山を下って宿にとって帰り、刀を持ち
抱えて稽古場のビジターセンターに向かう。





第二日目の稽古

午前中から午後にかけて型の稽古、昼食後巻き藁の試斬。

藁が少し乾いていて斬るのに難儀する。また疲れもある。斬り下ろした刀がドーンという異様な音を立てて藁に食い込んだまま抜き差しならない状態になった時の斬り手の情けない表情は見るに耐えない。

それでも死力を振り絞って残り40本の藁を五人で斬り尽くした。

一種の達成感というものがあり、それぞれ夜の食事の内容などに想像力を巡らせながら宿に向かう。

素敵な夕食後、漆黒の闇に沈んだ山に入り肝試しをするつもりでいたが、皆疲れ果ててぐったりしており、敷かれた布団にゴロゴロ寝そべっている状況である。彼らの尻を叩いて闇の中に追い込んでも得ることはないと思い直し、酒を飲んでの雑談タイムに切り替えた。（この辺りが私の弱さでもあるのだろう。強行して真っ暗闇と数時間向かい合えば、必ず得ることはあったはずである。来年の合宿の課題である。）

自分ではそれほど動くわけではないのだが、やはり相当に疲れていて、12時前には眠り込んでいたと思う。恒例のビール缶斬りはやらなかったが、含むことがあったからである。



<



華道会館での刀道講座

翌朝八時の食事の頃にはTさんがクルマで麓まで来て試斬台その他を運び込む準備を整えてくれた。

斬り屑の藁が一杯に詰まった大型のビニールゴミ袋20数個は、宿の方で処理してくれるということで、持って帰らなくても良いことになり胸を撫で下ろした次第である。

10時にケーブルカーで山を下り、待機していたバスで御嶽山駅に向かう。

バス停の近くにあるコンビニで私が缶ビールを二本買ったので、みんな「マダノムノオ」といった顔で私を見詰めていた。缶を斬るために買ったのであり飲むためではない。しかし買った以上は中身を空にしなければならないから、結局は飲むことになったのではあるが……。

というのも、この日、午後三時から、東村山の創美流華道の家元である華道会館で、私の刀道についての講座が予定されていて、そこで余興としてビール缶を真剣で両断する予定でいたからである。帰りの電車の中でも、みんな刀を抱えて居眠りしている。

合宿参加者全員が華道会館の講習を聞いて、合宿終了ということになっている。

みんな眠気・疲れと闘いながら、昼食を摂ったり、喫茶店で時間を潰したりしながら、刀とリュックを担いで華道会館に向かった。

華道会館での講演の顛末については別項をたてることにしよう。

2011年11月11月4日



14回目の「語り」があって2週間が経とうとしている。

本来なら印象も薄れかけている頃合でもあるのだろうが、むしろ印象は強まりつつあるから不思議としか言いようがない。

記事を書くのが億劫でいたずらに時を引き伸ばしていただけなのだろう、と影でささやく声が聞こえてくるようだが、一日引き伸ばすたびに自らに課した義務への思いが強まり、記憶がより鮮明となって脳髄を刺激するということがあるのである。



二幅の絵巻

開演真近に会場に入ったせいかほぼ満席で、一番前の席しか空いていなかった。2メートルほど前のステージ上で、椅子に腰掛けて粗筋を語る美貌の語り部を正視できず、目の前に立てかけてある俵屋宗達画の一幅の絵巻をじっと見詰める振りをしていた。

今日語られることになっている「関屋」の一シーンを描いたもので、逢坂の関の入り口前に置かれた源氏の黒塗りの車が中央にでんと置かれ、圧倒的な存在感を誇っている。

ステージの反対側に置かれた絵は、「関屋」の前の帖「蓬生(よもぎう)」の一シー

ンを描いたもので、野草が生い茂る荒れ果てた故常陸宮邸に源氏主従が立ち入る場面が描かれている。

つまり、この日読まれるのは第十五帖「蓬生」の巻と第十六帖「関屋」の二帖ということである。

荒れ放題の屋敷

「蓬生」で鮮明に描き出されるのは、第六帖「末摘花」その人である。第十一帖では末摘花と源氏の出会いが描かれる。

一夜の交情の後、月明かりの中で情を交わした相手の顔を月明かりの中で見た源氏は仰天する。その姫の鼻は長く垂れ下がりしかも熟れた果物のように赤い。

故常陸宮という皇族を父に持つ姫君の異様な面相に驚きはするが、立ち騒ぐようなみつももないことをしないのが光源氏という人である。

源氏は屋敷へ帰った後も、いかにも高貴な姫君らしい落ち着いて控えめで物静かな末摘花に好意を抱き、今は磊落して困窮を極める姫に届け物などをして面倒を見ることを厭わない。

しかし、源氏が須磨に蟄居して二年余、末摘花への援助は滞ってしまう。

蟄居を解かれ京へ帰還することが出来た源氏は、以前にも増して権勢をほしいままにすることの出来る地位を得るが、ある日ふと思い立って家来の惟光と共に末摘花の屋敷を訪れる。

しかし、その屋敷の築地塀は崩れ落ち、伸び放題の草木に覆われ、門はつた草が絡みついて開けられないほどの荒れようである。

それでも源氏は伸び放題の蓬草を掻き分けるようにして、末摘花が起居する場

所に辿り着く。使用人はどんどん少なくなり、信頼していた乳母子さえも立ち去って屋敷は閑散としている。

久方ぶりに姫と会った源氏は、止む終えない事情で無沙汰を重ねたことを詫びるが、末摘花はあえて恨み言を述べることもなく、気恥ずかしげではあるがおっとり構えて高貴な姫君の風情をかもしている。



男気と責任感のある理想的な男性

源氏は姫に、近い将来建築中の屋敷に引き取れることを約し邸に帰還してゆく。

源氏に命じられた家来たちが、崩れた塀を建て直し、雑草を刈り痛んだ屋敷を修復するなどして、狐狸妖怪の住処とも思えた屋敷が、みるみる新たな装いで建ち直ってゆく。

噂を聞きつけた元の使用人たちが、続々帰還して行く様子を述べるくだりは、ある種のカタルシスを伴う感動的な箇所である。

この帖は状景描写が多く、濡れ場も恋の駆け引きもない一見単調な記述に始終するが、源氏の人間性と人生観をはっきり打ち出している帖として注目すべきものがある。

顔の前に熟した果物を吊るしているような鼻をした姫は、思いっきり醜悪な面相の持ち主として描かれているが、心は純粹で誇り高く貞節な女性なのである。

そういう女性をいとおしく感じる源氏は(悪趣味といえはそうとられても仕方がないが)、権勢と美貌に任せて手当たり次第に漁色するだけのお坊ちゃんではないといふことを、作者は言おうとしているように思われる。

一度手を付けた女性は徹底して面倒を見る、男気と責任感のある理想的な男性として紫式部は源氏を造形するのである。その典型的な場面としてこの帖は選ばれている。

しかし、ただ源氏をひたすら理想化して祭り上げないところに、この物語が袈傑作小説の条件を備えた所以がある。人間心理の深い洞察力が存分に発揮されているからである。

源氏は色好みかゆえの様々な失敗や破廉恥や間抜けさを、これでもかこれでもかという具合に他の帖で描かれている。そのことによって、帝位を覗うほどの皇族の出でありながら、一個の人間として親しみを感じることができる構図となっている。

空蟬の顛末

「関屋」で再登場することになる空蟬は、源氏を巡る女性の中でも特異な位置を示す。

というのは、彼女(年老いた受領、常陸介の妻)は源氏が懸想して唯一目的を遂げることが出来なかった女性だからである。

第三帖「空蟬」でその辺りの事情が詳しく物語られている。滑稽な結末で締め括られているが、源氏の色恋にまつわる一つの失敗談なのである。

「関屋」では年老いた夫の常陸介が程なく亡くなるが、源氏が言い寄る手段として描かれるかと思わせて、実は常陸介の前妻の子河内の守に言い寄られて出家してしまうというという結末が語られる。

面白い展開であるが、私はこの日かなりの二日酔いで頭が朦朧としており、語り部山下智子さんの目の前でこっくりさんを漕いでいた瞬間が幾度かあった。

非礼を平に容赦願いたいが、毎度の事ながら、頭上から降ってくる語り部の美声を光り輝く光線のように浴びて、夢うつつの時を行き来する至福のときを味わったのであった。

次回は、出来る限り語り部の目に止まらない場所に陣取って、至福のときを味わいたいと思っている。



第24回刀道全国大会

<< 作成日時 : 2011/11/27 00:53 >>

2011年11月27日



多数の地域から参加

全日本刀道連盟の最大の行事である全国大会が去る20日に行われた。

午前中は曇り空であったが、午後から秋口のように太陽が照り付け、じっとしていても汗ばむほどの陽気となった。10時開始であったが9時を過ぎた辺りから続々と剣士の皆さんが道場に集まり、いつもながらの緊迫した雰囲気 が形作られていった。

まず受付と出場者の刀の登録証と目釘点検が主催者側によって行われ、所定の場所への集合が掛かる。

国旗と神前への拝礼、見所の先生方への礼の後、大会会長と審判長の挨拶が行われる。大地震発生後の東北地方から、山形を代表して神刀流抜刀術神山館

の剣士の方々が参加して下さったことに対して、大会会長から謝意が述べられ応援のメッセージが伝えられる。

今年も山形、沖縄、大阪、静岡など遠隔地から多数の剣士の先生方が参加され、いやが上にも熱気と緊張は高まってゆく。





女性剣士の活躍

昨年団体戦優勝の英信館からの優勝旗返還が行われ、ただちに規定刀法①が実施される。

この刀法は、試斬台に立てられた巻き藁を袈裟を中心とした刀法に従って6段に斬るものであり、定められた刀法を間違えることなく、きれいに刃筋をとおすことが求められる。

点数方式を採用し、斬り損じ、山欠け、体転無し、刃筋の悪さ、また礼法・所作の乱れなどは減点の対象となる。言うまでもないことであるが、芯斬り、台倒し、藁飛ばし、床叩きの場合は即座に失格となる。

今回は女性剣士の参加も多く、華を添えている。女性の場合は、半巻き(畳表の半分を巻いたもの)と決められていて、男性の場合の一本巻きに比べてやや優位であるが、斬れても刃筋が悪ければ上位には進めない。

結果は一位が荒木流拳法の保坂照之剣士が文句無く一位となった。

二位には我が文武両道塾の木下信也剣士が入った。文武両道塾では、剣術の基礎鍛錬、実戦刀法の型に主力を置いており、試斬は一月に一回程度しか行っておらず参加するだけが目標であったが、二位に食い込んだのは予想外ともいうべ

き慶事であった。

無双直伝英信流英信館



神刀流劍舞神城館



素心流居合抜刀術



荒木流拳法





糸澤道場





多彩な演武に感歎

続いて行われた規定刀法②では、荒木流拳法の西村佐保剣士が優勝。

名の通り女性剣士である。彼女は、据物斬りの部でも優勝してその名を多いに高めた。昨年据物斬りの部で優勝した佐藤亜里香剣士は連続優勝を狙っていたが、わずかのミスで入賞を逸した。安定した実力のある女性剣士だけに、一度の斬り損じは痛かった。

午後からは表演(流派の型と試斬演武)が行われ、参加流派の特徴を窺い知ることが出来、また何百年にも亘って受け継がれてきた古流剣術を目の当たりにして、眼福を養った次第である。いつもながら、素心流抜刀術の前園先生の五本斬りの業は見事という他はない。荒木流拳法の鎖鎌は滅多に見られない秘伝であり、棒を使った業も見ごたえがあった。





大会の華団体戦

大会の華は何といっても団体戦である。団体戦はトーナメント方式で行われる。

二組がそれぞれ先鋒、中堅、大将に分かれ、互いに定められた刀法で二本並べて立てられた巻き藁(一本巻と半巻)を斬る。

先鋒は相手の刀を左に払う動作をして右体転して一本巻を左袈裟、次に左体転して半巻を右袈裟で斬る。

二つの藁の間隔は二十センチ強であるから、勢いが強いともう一本の巻き藁に当たってしまうことになる。当たるということは切り込みを入れてしまうことになり、一本目を斬ったときに刀を止めることが出来た人に負ける算段である。

中堅は、二本の藁に背を向けて立ち、抜刀しざま振り向いて片手左袈裟で空を斬りその勢いで片手左逆袈裟で半巻を斬り上げ、振り上げた刀を両手で左袈裟に二本を同時に斬り下ろすというものである。

二本同時にスパリと斬れたときには、見ているほうもスキッとした気持ちになる。

大将は、右袈裟の片手抜打ちないし片手右袈裟で中堅が斬り残した一本巻を斬り下ろし、左受流しを入れて右から左へ水平で二本を斬る。

このとき片手袈裟斬りではなく、素早い抜打ちでスパリと斬って落とし、眼にも点らぬ速さで二本の藁を水平両断する剣士がいて、見守る審判席及び全剣士の注目を誘った。

結局この剣士が所属する神刀流抜刀術白龍館が優勝。連続優勝を続けてきた無双直伝英信流の英信館はあえなく二位に甘んじることとなってしまった。





神刀流創始者 日比野雷風

演武もまた見せ場が多々あり、いつものメンバーに加え、神刀流剣舞神城館の
剣舞は初めての参加であり、迫力のある見事なものであった。

神刀流は明治時代の剣客日比野雷風が始祖であり、実戦刀法に「繋がる剣舞
が元々の流派の基なのである。

余談であるが、私は連れ合いの親戚の墓がある鶴見の総持寺に出向いた折、
高さ三メートルほどもある黒御影石の墓石と出くわした。その凄さに驚いて刻まれ
ている墓標を読むと、「神刀流始祖 日比野雷風の墓」と深々と刻まれている。
鎖で繋がれた墓石を巡る寄進石には寄進者の名が刻まれていて、なんとその中

には日露戦争の立役者東郷平八郎、小玉源太郎の名があったのである！

正直言って腰を抜かさんばかりの驚いた。

当時、神刀流創始者は日露戦争の立役者を従えるほどの有名人であったわけ

である。家に帰って調べてみると、剣舞の創始者であることも分かった。

ということは、この日剣舞を演じた神城館のお二人は、神刀流の原点を披露した

ことになる。

色々な意味で、興味のある大会であった。来年は我が文武両道塾で参加者をあ
つと言わせる演武を行う予定でいる。団体戦も優勝を目指したい。それほどの気概

を持って稽古に励むという意味において……。

アラン・レネ監督「風にそよぐ草」を観て

<< 作成日時 : 2011/12/24 22:23 >>

2011年12月24日



映画文法を変えた監督たち

ある方から招待券を頂いて夫婦で岩波ホールに出向いた。今年 89 歳になるとい
うレネ監督の最新作と聞いて渡りに船と招待券を押し頂いた次第である。

アラン・レネという名前は、私の生涯にとって重要な位置を占める映画監督であ
る。私は大学では日大の芸術学部映画科演出専攻に席を置き、当時突如として勃
興した映画の革命期を満喫していた。

フランスヌーベルバーグがその代表である。

アラン・レネ、ジャン＝リュック・ゴダール、フランソワーズ・トリュフォー、イタリアのミケランジェロ・アントニオーニ、フェデリコ・フェリーニ、スペインのルイス・ブニュエル、スウェーデンのイングリット・ベルイマン、我が国でもフランスヌーベル・バーグの風に晒された松本俊夫、黒木和雄、大島渚、篠田正浩などが前衛的な映画を発表し、後世の監督たちに多大な影響を与えることになった。

ここに列挙した監督たちが映画の文法を変えたのである。その時期映画科の学生としてほとんど毎日それらの映画を観て日々を過ごした。それぞれの監督を個別に語りたい気持ちは抑えきれないほどであるが、ここはレネに的を絞ることにしよう。

映画史上最も難解な映画

アラン・レネ監督作品を改めて述べたて余裕はないが、彼のドキュメンタリー作品のうち、世界中の図書館をテーマとした『世界の記憶のすべて』アウシュビッツ収容所を描いた『夜と霧』はとりわけ記憶に新しい。

彼はそこでレールを使った移動撮影を多用し、対象の内面に入り込む技法を完成させた。この技法は(今回の映画でも冒頭に使われているが、)短編ドキュメンタリー制作の後に創られた劇場映画でも効果的に用いられている。広島原爆体験をテーマとした『二十四時間の情事』、スイスの保養地マリエンバードでの出来事を描いた『去年マリエンバードで』などで揺るぎない名声を築いた。

とりわけ『去年マリエンバードで』は、『消しゴム』などの前衛小説で注目されたヌーボーロマンの旗手アラン・ロブグリエを脚本家に迎え、脚本家の見解と格闘しながら創り上げた作品として話題をさらった。

この作品は映画史上最も難解な映画と言われ、評論家の見解も真二つに分か

れて何をどう論じていいか分からない状態であった。

卒業論文

その当時私は大学の四年目を迎えようとしており、卒業制作の準備に掛らなければならない時期にあった。アルバイトで生活費と授業料を払う生活を余儀なくされていた私にとって、卒業制作に要する高価なフィルム代(16ミリフィルム)や機材の確保は困難といえた。

しかし、映画を撮ることが出来ない学生は論文でもよいという規定があったので、私は論文提出に決めた。

どうせ論文を書くなら誰もがやりたがらない困難なテーマに挑戦してやろうと思い、映画史上最も難解な映画『去年マリエンバードで』をテーマに選んだ。

この映画は当時新宿の「アートシアター」劇場で上演されており、そこで邦訳された脚本が売られていたのでその本を買って毎日劇場に通い、脚本と見比べながらひたすら同じ映画を見続けることにした。(現代ではこうした前衛映画が新宿の真っ只中のロードショー館で上映されることは考えられない。それが可能であったということが当時の映画に対する人々の熱狂ぶりを物語っている。)

脚本と照らし合わせながら何回見ても映画の難解さは変わらない。つまり、作家が何を言おうとしているかが把握出来ないのである。

ある女性が保養地マリエンバードを訪れ、人と会い内面を眩きまたフランスの自宅に舞い戻り、そこでも内面の眩きと過去の映像が脈絡なく重なる。過去と現在が絶え間なく行き交いそこに想像の映像が差し挟まれる。

一切の説明がない。作家と監督の内面の揺らぎをそのまま映像化しているごとくである。つまりは一貫した物語としての解釈を拒んでいるとしか考えられない。

そのことに思い当たり、自分の感性で自由に解釈することにした。当然ながら、レネの作品論や『映画とは何か』

といったフランス語原文を銀座のイエナ書店で買い求め、ひっきりなしに辞書を繰りながら何ヶ月もかけて読み進めるかたわら、当時私は哲学の本ばかり読んでいたので、映像とは何かを哲学で解釈することにし、ハイデガーやニーチェを持ち出し、あるいは老荘思想を援用して百数十枚の論文を仕上げた。

論文は一発で受理されたが、担当教授(映画評論家の登川直樹先生)は、提出論文中最も長文であった旨をおっしゃった。先生の感想としては、あまりにも解釈が多岐にわたっており、自分流の意見が突出しすぎているといった意味のことを言われた記憶がある。

教授の挑発

四十数年前のことであり、教授の発言を正確に再現することは難しい。ただし、先生が卒業論文提出を前にして、教室の対象者全員に言った言葉は今でも正確に憶えている。先生はこう言ったのだ。

「君たちはこれから何十枚といった論文を書くことは無いのだから、卒業論文は生涯の記念になる。」

その時私は頭をゴツンと殴られる思いがした。卒業を前にした学生だから、みんな21、2歳前後である。前途有為の若者ばかりである。将来、映画監督はもとより、作家、詩人、評論家になる人が出ないとは限らない。

それを生涯「何十枚といった論文を書くことはない」と断言したのである。

この教授の学生に対する侮蔑的発言に怒りを感じたそのときの感情をはっきりと思い起こすことができる。

一般教養科の学生に対して述べるのであれば、許されることかもしれない。少なくとも、芸術学科の学生に対して言うべきことではないはずだ。明らかに侮蔑の」発言である。

教授は東大美学科の出身と聞いている。東大の美学卒業生に対して同じことを言えたか？と私は問いたい。教授は暗に「日大出身の君らにそんな能力があるはずがない」と言っているように私には聞こえた。

その憤懣は今でも胸にわだかまっている。登川教授はその後芸術学部長になったと聞いている。しかし、評論集などの著書の出版は見たことはないし聞いたこともない。映画評論家としては怠惰であったというしかない。

すでに物故されて久しいが、先生を貶めるつもりは毛頭ない。むしろ教授の発言は私のそれ以降の生き方の張り合いとなったほどである。教授の我々に対する挑発であったとあえて考えれば納得がいく話ではある。

内面に入り込む移動撮影

色々回り道をしているが、私がレネを語るためには避けては通れない道筋と思っ
ていただきたいと切に願うのみである。

いよいよ本題である。映画『風にそよぐ草』という題名にどのような意味を見出すかということから始めなければならない。

本当は意味など何もないのだ。それは自然界のごくありふれた現象でしかない。

であれば、人間も自然界の一員であり、風が吹けば草がそよぐように、戦争が起
きればざわざわと波立ち、事が起これば生き方や心理に波風が起きる。

あることが起きてそれまで見知らぬ同士であった男女の間に波風が立つ。それ
をいささかエキセントリックに描いたのがこの映画である。

冒頭、荒れた草地に建つ巨大なサイロのような、あるいは昔日に隆盛を誇った荒れ果てたお城のような、石積みの円形の建物にポツカリと空いた暗い空洞(入口)に向かって、カメラはゆっくりと近づいてゆく。

『夜と霧』の冒頭で見せた、アウシュビッツ収容所のガス室の入口にゆっくりと近づいてつくシーンと重なる。そこからすべての物語が始まるのである。

まるで壊れた人間社会に踏み入って行くように。その冒頭のシーンは、この映画の内容を象徴しているかのようである。荒涼とした廃墟の建物にカメラは侵入して何を見たのか？

物語の始まり

建物とは一切関わりのない物語が進行する。沈鬱な男のナレーションと共に、街を歩く人々の足元が写される。

街路を歩く多数の足元はやがて一人の女性の歩く姿に修練され、ついで顔が映し出されその足は馴染みの靴屋に向かう。

この女性が物語の主人公である。あまり美人とはいえないソバカスだらけの中年の女性である。

お目当ての靴を買って帰る途中、バイクに乗った若者のひったくりに会いバッグを盗まれる。無一文になった彼女は、再び店に出向いて靴を返却して代金を受け取り、当座の費用に当てる。

ハンドバッグは返ってこなかったが、盗まれた財布がどこかの駐車場へ投げ捨てられていて、それを老年に近づいた男が拾う。

現金は抜き取られていたが、免許証などのカード類はそのまま入っており、その中に飛行機操縦免許証があるのを見て、男は大いに興味を抱く。

彼は青年時代パイロットになりたかったが、それを果たせず現在に至る飛行機オタクなのであった。

彼は結婚して一家を成しており結婚した一人娘がいる。彼はすでに現役を退いた年金生活者である。落とし主の住所電話番号を控えておいて財布を警察に届ける。

彼は、飛行機操縦免許を持つ彼女に憧れを募らせる。警察から連絡があったであらう彼女からのお礼の電話を待ち続ける。

ついに彼女から電話が掛かってくる。普通の人間ならお礼に対して「いいえ、どういたしまして」で会話は終わるところである。ところが男は、「他に言うことはありませんか？」と問いかけ、相手が「どういうことですか？」と訝しがると、「たとえばお会いしたいとか」と言ってしまうのである。

当然相手は当惑して「そのつもりはありません」と答える。男は怒って電話を乱暴に切ってしまう。

「猫の餌を食べれば、猫になれるの？」

その辺から男のエキセントリックな挙動が始まる。自分の乱暴な電話の切り方を反省し謝罪の文面を認め、女のアパルトマンに出向いて手紙を差し入れたり、それを拒絶する女の車のタイヤを切り裂いたりするストーカー行為が始まる。

女は恐怖を感じて警察に届けるが、告訴はしなし弁償も求めないという。

届けを受けた警察は男の家に出向き、二度とストーカー行為をしないように厳重に注意する。

男は同意して電話を掛けたり手紙を書いたりする行為を止めるが、今度は女の方で男の存在が気になり始め、男と会う決意をする。

嚴重に抗議するとかストーカー行為があれば警察に訴えると言いに行ったわけではなく、男に会ってみたいという一心からである。だが男は強気に出て女を追い払ってしまう。普通なら女はそこで男との関わりを断つのであるが、女は再び会おうとして男の家に押しかけ、またしても激しい叱責と拒絶に遭う。

女はそれにも関わらず、男と奥さんに、自ら操縦する飛行機の遊覧飛行に招待したいと何度か呼びかける。初めは断っていたが、ついに招待に応じることにした。

女の友達の案内で飛行場に向かい、女の操縦する小型遊覧飛行機に夫妻で同乗し、遊覧飛行に出掛ける。女は男が航空機マニアであることを知っており、操縦してみるかと尋ねる。奥さんは止めてくれと懇願するが、男は操縦桿を握る。

ところが男は飛行場でトイレに行ったとき、前のチャックが途中までしか上がらず、それを操縦席の女に気にする余り、操縦桿の操作を誤り飛行機は墜落する。あたかもその結果を意図して夫妻を遊覧飛行に招待したかのように。

墜落したと思われる岩場が映し出される。

突然画面が切り替わり、(これまでの映像とはまったく関わりのない)ベッドに半身を起こした少女が、傍らの母親に向かって、
「猫の餌を食べることができれば、猫になれるの？」

と訊くシーンで FIN(終)の字幕が出る。母親の答えはない。答えることが出来ないのである。少女はまだ猫の餌を食べれば猫になることが出来ると思っている。

だが、自然と乖離してしまった現代社会で、猫の餌＝自然に回帰することはもはや不可能であることを、レネ監督は言おうとしているのかもしれない。あるいは、まったく違った解釈を要求しているのかもしれない。

人を食ったような終の仕方である。観客は狐に包まれたように疑問と戸惑いの溜

息を漏らし、それぞれに考え込んだ風で席を立とうとしない。

クレジットタイトルが流れる中、誰も席を立とうとしないのを尻目に私と妻は出口へ向かった。

唐突なラストシーンの意味を私なりに考えてみた。『去年マリエンバードで』の監督にふさわしいような映画の終わり方である。これは普通の物語映画ではないぞと言わんばかりである。

傑作か、それとも……

しかし、謎解きの楽しみはあるとしても、いたずらに観客の意識を混乱させるだけの茶目っ気たっぷりの映像としか言いようがない。物語は誰にも分かるように進行しているのであるから、突然謎解きのような映像を挟むことは監督の気まぐれ以外の何ものでもない。映画の感興を損ない統一性を破壊する。

たとえばゴダールの『気違いピエロ』はハチャメチャな映画であるが、それなりに統一性があり、ハチャメチャぶりを堪能できる。フェリーの『8+1/2』にしてもそうである。

ハチャメチャぶりが一貫していないのがこの映画の欠点である。ここに登場する主人公の男女は、日常生活者としての感覚が麻痺しており、どちらかといえば不安神経症の患者である。つまり精神を病んでいる。

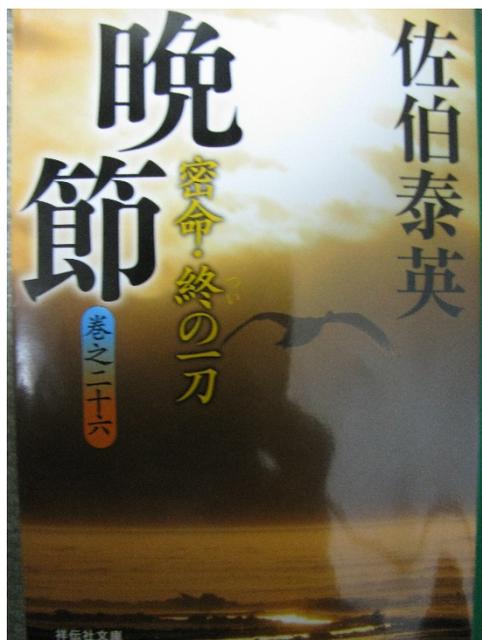
冒頭のシーンがここで意味を持ってくる。それは神経を病んだ人間社会への入口なのである。戦争がその影を落としていることが暗に描かれている。

しかし全体として映画に対する共感度は薄い。難解をもって鳴る前衛映画の監督として、また物語へ対する感情移入の度合いの薄さからして。

普通の人と感覚が狂った男女を描き、日常的に誰にでも起こりうる感情の落差と気分の変化をきめ細かく描いているところに監督の非凡な芸術的感性を感じさせるが、突出したものとは言い難く、したがって佳作とも傑作とも言いようがないのがこの映画である。

(今年の12月17日より神田『岩波ホール』でロードショー上演中)

2011年12月25日



リアリティの急速な減退

ついに『密命』シリーズが完結した。遅きに失するほどである。

清之助の活躍を余りに長々と書きすぎて後半にダレが生じた。私はこのシリーズが好きで、熱中するあまり、各巻に登場する遣い手の技を研究する「密命・剣技の研究」と題する連続評論をこのブログで発表したほどである。

しかし、「研究」終了の項で述べたように、技が余りにも非現実的にして小説的となってきたため、これ以上剣技の追求は無駄と思ったわけである。

そういう経緯があるので、このシリーズにはことさらに愛着があるのである。20巻当たりから主人公金杉惣三郎の倅清之助が表面に躍り出てきて無類の強さを発揮するようになるが、(すでに述べたことであるが)剣が群を抜いて強いばかりで

はなく、清廉潔白で何の落ち度もない人格者として描写され、人間的に全く面白味のない人物に造形されている。

なおかつ、秘剣「霜夜炎返し(そうやほむらかえし)」の実態は、水平に抜き放った刃面にムラムラと炎が萌え立つというものであり、相手はその炎に驚いて一瞬気を取られた瞬間、上から刃が落ちてきて真二つにされるという筋書きである。

これはなずな使い(手品、魔法使いの類)の技であり、あれほど修行を積んだまっとうな剣術家に適用すべきではない。清之助の無類の強さはいわくつきなのである。

従って、いくら清之助が勝ちを収めても、父の惣三郎の剣技のようなアクチュアリティを帯びることがない。清之助登場の巻で急速にリアリティが損なわれるのはその点なのである。

むろん、「密命」は剣技だけではなく、家族の結びつきを濃厚に描いており、他の剣豪小説にはない特徴であるが、肝心の剣技においてリアリティを損なうと、本と読者の距離が限りなく遠のいてしまう。

惣三郎の最後

さて、完結編では惣三郎の去就が注目されるわけであり、上覧剣術大試合に際し、倅清之助に対抗できる相手を見付けて徹底的に剣術を指導し、大試合に備えるという不可解なシチュエーションが設定される。つまり、倅を倒す側に立つのである。

そこには当然裏があると読者の誰しもが思うところであるが、前巻(25巻)では明かされることなく最終巻に引き継がれる。最終巻をまだ読んでいない人にその理由を明かすのは、感興を削ぐので敢えて言わないことにするが、要は主人公惣三

郎の死場所を設けることにつながる。

惣三郎がこの巻で最後を遂げるというのは、全巻を読み進んできた読者にとっては驚きなく受け止めてもらえるはずである。

その替り、上覧剣術大試合に優勝した倅精之助は三千百石の大身旗本に取り立てられ、予定通り婚約者の葉月と結婚して二児を設け、何不自由なく暮らす身分を得ている。

惣三郎の妻のしのも夫の帰還を諦め、お婆の立場で子供や孫たちに囲まれて幸せに余生を送る設定と描写がなされている。

尾張徳川家との対立

八代将軍の後継争いで涙を飲んだ御三家尾張徳川家と将軍家との確執は、その時の尾張藩当主継友の死去を経て弟宗春に受け継がれるが、その史実は小説の時代背景としてふんだんに取り入れられている。

宗春は八代将軍吉宗の儉約を旨とする政策方針に逆らって、奢侈お構いなし、芝居小屋や遊郭を大々的に復活させ、名古屋城下を熱く膨れ上がるほどに活性化させた。

小説では描かれてはいないが、当然幕府への露骨な挑戦であり許しておくわけにはいかず、数年後宗春は隠居させられたばかりか、その死後墓石は鎖を巻き付けられ、解くことは許されなかったと史書は伝えている。

そういう時代に金杉父子は生きた。従って、八代将軍吉宗の密命を受けた父子は尾張の刺客と死闘を繰り広げることになった。

上覧大試合で惣三郎が倅の対抗馬を立てたのもそのことと密接な関係がある。そのカラクリは最終巻で明らかにされるが、そこで繰り広げられる剣の闘いはもは

や気の抜けたものに等しく、作者の熱意が伝わってこない。

惣三郎の死が華々しく描かれるが、読者は予定調和として冷静にその描写を受け止めることができる。

最終巻はそこで打ち切らざるを得ないほどに疲弊しており、気の抜けたものとなったことは残念としか言いようがない。

しかしながら、多年に亘って我々を興奮と深い興味の世界に誘ってくれた作者の労力、胆力、努力、筆力に敬意を表し、この長いシリーズの終息を嘉したい。